

一月総評

立花 開

朝の落葉集めて心臓の匂い

吉沢 美香 宮城県

臓器の匂いは、本能的に嗅ぎたくないという気持ちになる。心臓なんて特に。けれど、朝の一切の埃ぼさのない清浄な空気と、集めた落葉から立ち昇る湿り気が混じり合う匂いが心臓のそれなら、美しい心臓を主体は知っているのだろう。鼻腔の奥に届くように思い切り吸い込む、美しい血をつくりだす美しい心臓の匂い。

またね 肋骨のような白い駅で

佐藤 知春 東京都

肋骨は体のほんの一部分であり、果てしなく巨大な何かの生き物がいた気配のある駅。「白い」という感覚は寒々しく、今にも散りそうな心や命そのものの弱々しさを感じる。この「またね」は、おそらく訪れない。互いにそれを分かっているながら言う再会への希望は、もはやないほうがよかった。未練ほど、未来をかき消すのだ。

寒の梅帰って来なくて良ければ
どこまでも歩けるよどこまでも

ほしはかせ 群馬県

「帰る」という、どうしようもなく悲しく、繰り返す程に安心が根深くなる行為。安心は、逃れられなさとも感じる。もし帰らなくてもいいならば、自分ならどこへ向かうだろうか。「どこへでも」のリフレインは、唱えるたびに遠くへ遠くへと心の見つめる先が進んでいってしまう。帰らないことの寂しさと自由。

この宇宙すら、二つ目のマトリョーシカ。一人で歩くと涙がこぼれるから。

平岡 樺音 広島県

たった1つに、たった1人に、どうしてもなれない。何かに内包されている、そして、自分も何かを内包している。「わたし」だけで立つことに身を焦がしている限りそれが叶うことはなくて、泣きながら宇宙の何処かにある1つ目のマトリョーシカの切れ目を探す。自分にもある切れ目を撫でながら。

ことごとく菜の花泳げそうなほど

深谷 健 埼玉県

ことごとく、とは、すべてという意味。すべて菜の花。視界いっぱい春が目の前にあるということ。春の気配は、どの季節より視界を埋め尽くしてくる気がする。桜、菜の花、雪柳：春の花は細かく、密に存在する。泡立つように咲く、とも言うのかもしれない。視覚も心も、見つめた時にはもう泳ぎ出している。

しおかぜに吹かれて

春をまっている

つぼみのようなちわわのあたま

さいう 石川県

チワワの後頭部が見える。海に向かいながら匂いを嗅いでいる。彼には、目に映るように春が匂っているのだろう。ほころびそうな蕾の香りに心を奪われたチワワのあたまも「つぼみのよう」。描写があたたかく、短い体毛が丸い頭をみっしりと覆っている温かな体温に、眼差しの温度が感じられた。

花野とは

たましいだけでゆくところ

湯島 はじめ 東京都

身体という、この世の縛り。どこへでも行けるようで、本当はどこへも行けない。身体と

いう存在が他者との契約を作り、温度を保ち、心に侵食してくる。何も欲しがらないことが本当は何もかもを欲しているのと同じで、たましいだけになるという何もかもを手放すように総てを手に入れようとしている姿。

間違つてスノードームで飼う金魚

飛和 長野県

「おそらく、普通は間違えない」と書き始めようとしてはつとした。私たちが思う「普通」とは、誰かにとってはそうではないかもしれない。スノードームへ金魚を入れたことは、主体にとっては意味があったのかもしれない。酸素濃度が0になるまでの命として消費されていても。

教室でいちばんまぶしい席にいる
打ち上げにぜったいに来ないひと

小川いなせ 茨城県

憧れは、本当はもっとも苦い。自分がいききたいのにいけない場所にその人がいるからだ。作中主題は、行きたくない打ち上げにもおそらく行く。けれどあの「ひと」は1人で断つて行かない。話してみたいのに話す機会もなく、時間だけが過ぎていく。まぶしい席にいるのではなく、そう見えている。

柿を食えば
柿を食えない季節から
遠ざかってゆく
そんな秋

大嶋 碧月 兵庫県

春夏秋冬で考えたら、3つの季節の間柿は食べることができない。旬の季節が鮮やかであればあるほど影の部分は濃くなるが、その部分をうまく抽出した作品。一口ごとに柿、すなわち「秋」に体も心も集中していく。秋以外の季節への感度が薄れる。